

## ディベートを土台にしたコミュニケーション活動

### The Communicative Activities Based on Debate

佐々木 智之\*

Tomoyuki Sasaki

#### 概要

学習者、特に入学後間もない1年生に、本学の基本教育科目「プロジェクトスキルⅠ」で他者とことばをやりとりすることでコミュニケーションを図る場を取り入れた、ディベートの要素を取り入れた活動を例示し、1年生に必要なコミュニケーション活動の要件を考察する。

#### 1. 科目の達成目標

- 1) 大学生活及び学科での学習内容を理解し、行動意識を高める。
- 2) 社会一般の知識や調査内容を整理することができる。
- 3) まとめた内容を他者に論理的に伝えることができる。
- 4) 他者との関係を構築し、協働を行うことができる。
- 5) 協働作業を通じて、他者とのかかわり方や主張を理解できる。

#### 2. プレディベート

立論・質疑・反駁の流れをとる本格的なディベートは、未経験者にとって難易度が高いため、入門的な活動から段階的に高めていくアプローチが必要である。難易度を低めつつ、ディベートの要素を兼ね備えた疑似的体験活動を編成した。

編成：4人で1つのグループを作る。

役割：それぞれのメンバーに4つの役割A B C Dが与えられる。

流れ：テーマが与えられてそのテーマに対して、Aが肯定的な意見を言い、Bは逆に否定的な意見を言う。次にCが、AとBの意見に対して質問をする。最後にDが、AとBの主張を聞いてまとめのコメントをする。

テーマ：導入の段階では「スマートフォン」

「eメール」といった単体のものについてその良い面と悪い面を指摘する。段階を経るごとに「同性婚」「首都機能移転」といった社会的な背景をもつ話題へとレベルを高めていく。

いく。

座席：聞き手から見て、左側が肯定、右側が否定になるように、A BとC Dが対面して座る。

A	B
C	D

図1 活動時の座席

時間：AとBが自分の意見を主張するスピーチは1分程度から始め、学習者の習熟度によって時間を伸ばしていくことが望ましい。Cの質問は相手からの応答も含めて2分とした。最後のDのまとめのコメントは2分である。学習者の実態に応じて、各ステージの間に考える時間を設ける。特に質問者のC、まとめのコメントのDは配慮が必要である。何も言えないという経験をさせてしまうと、話すことが中心となる活動に対して抵抗感をもってしまう。

ローテーション：この活動では4人がすべての役割を体験できるように、Dのコメントが終わると時計回りに役割を変えて新しい回を始めた。

90分の授業で、全員がA～Dまでを体験する。それによってディベートの基本的なところを理解することができる。Aは肯定側、Bは否定側、Dは審判である。この活動では反駁の部分を省略している。

この活動の長所は、テーマとスピーチの時間を変えれば多様な学習者のレベルに柔軟に対応できる点にある。

\* 北海道科学大学未来デザイン学部人間社会学科

### 3. ディベート

今年度1年生が実践したディベートへの取り組みは以下のとおりである。

#### 3.1 論題

平成28年7月の選挙から、18歳の国民に選挙権が認められた。28年の新入生がまさに新しく選挙権を与えられた学年であることから、「18歳への選挙権年齢の引き下げ」を論題とした。

#### 3.2 ディベートの流れ

スピーチの順番と時間は下表のとおりである。

表1 ディベートフォーマット

	肯定側	否定側
1	立論（3分）	
2		質疑（1分）
3		立論（3分）
4	質疑（1分）	
5		第一反駁
6	第一反駁	
7		第二反駁
8	第二反駁	
9		

表には書かれていないが、質疑の前、各反駁の前には1分間の準備時間をとった。

#### 3.3 学習の意義

ディベートを行ったことの意義を、この科目の達成目標とのかかわりから省察する。

準備段階に着目する。プレディベートとの最大の相違点は、事前準備である。18歳選挙権のメリットを立証する肯定側、逆に弊害を指摘し現状維持を主張する否定側、双方が自分たちの主張を支えるエビデンスを立論の中に盛り込まなくては聴衆を説得できない。必然的に社会一般の知識や調査データの吟味を行うことになる。

ディベートは短時間のスピーチが連続する。短い時間で、いかに自分たちの主張が相手より優れているかを示すには論理性が必要である。ただ調べてきたことを話しても説得にはつながらない。よりわかりやすくするための順番や構成、証拠資料の配列などを聞き手の立場になって工夫する。

肯定、否定の立場を4人のチームで担当する。チームワークの高い集団は準備段階からその力が発揮される。立論、質疑、反駁のそれぞれがどのように機能すれば勝てるかを事前に考えているチームはスピーチ間の連携が生まれる。また試合本番でも、スピーチ間の準備時間は、そのチームの結束が見て取れる。次のスピーカーにアドバイスや指示を出しているチームはチーム内コミュニケーションが良好である。以上のことからディベートは、1年生が取り組む実践的コミュニケーション活動として有効であると言える。

### 3.4 事後アンケート

本授業の受講者54名に対して、選挙とのかかわりを調査した。

Q1：あなたは選挙に行きましたか。

投票率は65%であった。

投票に行った理由を複数回答可で選択肢から選ばせたところ、他者からの働きかけが最も多く18人。初の18歳選挙という話題性（17人）、国民の権利だから（12人）、政治に多少なりとも興味あり（5人）と続いた。

投票に行かなかった理由は、行けない用事があった（9人）、投票しないという意味（5人）、居住区の関係（2人）、忘れていた、めんどくさい、興味なし（各1人）であった。

Q2：今回のディベートはあなたの行動に影響があったか。

この質問に、投票に行った35名がどう答えたか。27名が、影響があったと答えている。具体的には、行かないつもりだったが投票に行ったこと、色々考える機会となりいわゆる「フィーリング投票」は良くないと思ったことが書かれていた。

投票に行かなかった19名の回答も興味深い。色々なことを考えた結果だということが読み取れるが、知識がついたことで明確な意思をもてて投票しないという行動をとったと書いた者が複数いた。この行動と根拠をどうとらえるかは、ディベートの教育的意義を考える視点になる。

### 4. まとめ

ディベートは話す力を培う実践的活動であると同時に思考のレッスンでもある。ディベートを学習する前は選挙に対して表面的なイメージしか抱いていなかった、もしくは考える対象にすらしていなかった学習者が、肯定否定の両面から18歳選挙権について議論したことにより明確な根拠をもとに自分の意思をもつこととなった。学習対象のとらえ方が、単なるイメージから根拠を伴った主張へと発展したのである。この変化は準備段階、実践、振り返りという一連の流れで成り立っているディベートが、学びの場として有効であることを物語っている。

旧来の講義中心からアクティブ・ラーニングへの変革が求められている。ディベートでは、学習者が調査し、他者と議論をすることで主体的に考える場がもたらされる点で、アクティブ・ラーニングの要件を兼ね備えたコミュニケーション活動と言える。

### 参考文献

- (1) 池田修：中等教育におけるディベートの研究、2008。
- (2) 鈴木健：クリティカル・シンキングと教育、2006。